

よろず引受け同心事件帖

招き猫

楠木誠一郎



招き猫

よろず引き
用
小
書
帖



楠木誠一郎



学研M文庫

よろず引受け同心事件帖 招き猫

楠木 誠一郎



学研M文庫

2011年9月27日 初版発行

●
発行人—— 脇谷典利

発行所—— 株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元—— 株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本—— 中央精版印刷株式会社

© Seiichiro Kusunoki 2011 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは—— 編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター「よろず引受け同心事件帖」係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002(学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複写権センター TEL 03-3401-2382

Ⓒ日本複写権センター委託出版物

目次

第一話 猫婆

5

第二話 ぐりはま娘

98

第三話 絵馬盗人ぬすつと

193

招き猫

よろず引受け同心事件帖

楠木 誠一郎



学研M文庫

目次

第一話 猫婆

5

第二話 ぐりはま娘

98

第三話 絵馬盗人ぬすつと

193

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

第一話 猫婆

一

「あら、やだ。雨が降ってきそう」

女将おかみのお彩さいが、縄なわ暖簾のれんをそつと手で分け、障子戸を閉めてから店のなかにもどってくる。

間口一間けん（約一・八メートル）の障子戸には、小さく「おかえり」と遠慮がちに書かれている。

「おかえり」——挨拶言葉ではない。永代えいたい橋西はしにし詰じから少し南西に入ったあたり、白壁の土蔵が建ち並ぶ、下り酒問屋が多い霊岸島れいがんじま四日市よっかいち町の角にある居酒屋の屋号だ。

店に入ると、お彩が「おかえりなさいませ」と温かい声をかけてくれる。

お彩は、今日は茜色あかねの小袖を身に纏まとっている。

ちよこちよこと足を動かすたびに、下駄が鳴る。柿渋色かきしぶの帯のうえの胸の膨ふくらみ、小袖の裾から覗く細い足首に目がいく。

四十近いはずだが、十歳ほど若く見えるほど、艶めかしさを保っている。切れ長の目、高い鼻梁、ぷつくりとした唇。吉原よしわらにいたら、頭角を現し、花魁おいらんに上り詰めていただろう。名斎めいさいは、妻お承しやうと比べそうになり、頭かぶりを振った。

「おふたりとも、帰りに雨に遭わないといいのですけど」

そう言いながら、調理場に立ち、飯台はんだいをちらと見る。酒の進み具合、減り具合を確かめる。

「もう一本、おつけしましょうね」

お彩は、爛かんをつけはじめた。

北町奉行所臨時廻り同心どうしんの小出名斎は、小鉢に残った突き出しを箸で突いた。今日の突き出しは、葱焼ねぎきだ。

塩をばらばらと振って焼き、醤油しょうゆを垂らしたただけだが、葱の出来がいいので美味うまい。口に入れて噛むと、しやしきと、いい音がする。ただし気をつけ噛まないと、葱鉄砲で喉のどを火傷やけどしかねない。たまらなく熱いのだが、その汁がまた口中に広がり美味しいのだ。

「この葱は……」

名齋が訊くと、お彩が答えた。

「千住葱です。葱は、薬にもなりますし、ほんと重宝しますわ」

いま、店に客はふたりしかいない。

名齋と、岡っ引の勘六だけだ。

爛をつけながら、お彩が訊いてくる。

「八丁堀の組屋敷のほうは、お変わりありませんこと」

北と南の町奉行所には、多くの与力、同心がいる。内勤の者はもちろん、奉行所が管轄するすべての役所に配されている。

なかでも、花形とされているのが、隠密廻り、定町廻り、臨時廻りの、俗に「三廻り」と呼ばれる同心だ。

三廻りには、上司にあたる与力はいない。町奉行が直属の上司となる。

お彩は、もとは定町廻り同心の妻だった。

だが十年ほど前に亭主が殺された。京橋の小間物問屋の若い娘を拐かして、

金をせしめようとしていた鋸職人を捕まえようとして、刺されたのだ。鋸職人だった男は、商売が傾いた小間物問屋に出入りを差し止められて暮らし向きに

困り、そのせいで病気の妻が薬を買えず死んでしまい、逆恨みさかのすえにやらかしたことだった。男は打ち首になった。たしか当時、十いくつかの息子がいたと聞いている。

お彩は子供がなかったため実家にもどっていたが、ほどなくして両親も他界して身寄りをなくしたため、この霊岸島四日市町に居酒屋を開いたのだ。もう七、八年になる。

店を開くとき、お彩の亭主の先輩にあたっていた、名齋ちちりようぞうの義父良蔵が、家主いえぬしや地回りのやくざ者にひと声かけたと聞いている。この「おかえり」には、八丁堀の役人がたくさん出入りするので、おかしな真似はするな、と。

爛をつけながら、お彩が言う。

「いま、鮎あゆを焼きますね」

「鮎ですか、もう、そんな時季ですか、いいですね」

お彩が、もともと同心の妻だったこともあり、名齋、勘六だけでなく、足繁く通うほかの与力・同心たちも話し方が丁寧になる。

お彩が鮎を焼きはじめると、香かうばしい匂いが立ちはじめた。

「あ、そうそう。先日、お義父とさまが、卵を持ってきてくださいましたのよ」

組屋敷の裏に住む富永家^{とみなが}が、病弱な妻多江^{たえ}の滋養^{にわとり}のため鶏百羽を飼っているのだが、故あって、小出家、いや、名斎と良蔵が面倒を見ているのだ。

「卵、味はいかがでしたか。わたしが^だ出汁巻きを作ると、甘すぎるらしく、家の者に評判がいまひとつで」

隣の勘六が、白い無精髭^{ぶしようひげ}をまわりに生やした口を「へ」の字に曲げて、うなずく。

「たしかに、旦那の作る出汁巻きは甘いです」

お彩が、微笑^{ほほえ}みながら、うなずく。

「出汁巻き卵は、味が難しいですものね。ひとりひとり好みがちがいますから、みなが美味しいと思える味を出すのは、たいへん。味の濃いのを好む人、甘いのを好む人、あつさりめを好む人……いろいろいらっしゃるので」

「そうなんですよ」

「甘いのは、わたくしも好きですわ」

名斎は味方を得た思いで、うれしくなった。

さらに、お彩が訊いてくる。

「お義父さまによれば、仏壇がひとつ増えて、鶏の世話もしなければならなく

なっただけでなく、お義母さまのお友だちも居候いそうろうされているとか」

日本橋の呉服問屋「丸喜まるき」の家の仏壇を預かる羽目になり、また義母お勝かつの三味線仲間、旗本相良宗右衛門はたもとさがらそうえもんの母お千代ちよも、いま組屋敷に居候しているのだ。お彩が笑う。

「また、いろいろと、引き受けてしまわれたのですね」

「ええ、まあ」

隣に腰掛けた勘六が、わざとらしく、「はあ」とため息をつき、細い目で名齋の顔を意味ありげに見上げてくる。

その勘六をちらと見て、お彩がおかしそうに笑った。

組屋敷には、義父良蔵、義母お勝、居候のお千代のほか、妻お承、十六歳になる娘お凜りんがいる。

小出家は、お勝、お承、お凜の女三代、いや三人組が中心となって回っている。

男である良蔵、名齋は肩身が狭い。

良蔵だけでなく、名齋も、小出家の婿養子むこなのだ。

名齋が生まれ育ったのは、壱岐家いっきだ。

七十歳になる父景齋けいさいは書物奉行同心だったが、いまは隠居し、兄秀齋しゅうさいが跡目を嗣いでいる。

書物奉行というのは、幕府が保管する十万冊ともいわれる蔵書を分類、整理、保存、そして文献調査をし、抄出しょうしゅつして上呈じょうていする役目だ。定員は二十一名。その二十一名いる同心のひとりが景齋だった。

景齋は学識高く、歴代奉行の信任も厚く、ほかの同心たちが手をつけたがらない難しい蔵書を受け持ち、とくに抄出する才に長たけていた。

書物奉行同心は、同じ同心でも、定町廻り同心などとちがって、商家などからの袖の下もなく、小禄しょうろくで貧乏だった。

父より十歳若い母とせは、八丁堀の組屋敷の隣近所から、繕つくろい物を受けては針仕事ばかりしている。

次男の名齋は、小普請組こぶしんぐみに属す「部屋住み」だったが、兄が跡目を嗣いだのを機に、小出家の婿養子となり、ふたつ年上のお承と夫婦になった。いまから十七年前。名齋が二十三歳のときのことだ。

お承の父良蔵は、定町廻り同心として長く勤め、四十を超えてから臨時廻り同心となったと聞いている。いまは六十七歳。妻お勝は七歳年下。

名齋も、まったく同じだ。まだ臨時廻り同心になって間もない。

臨時廻り同心の定員は六名。定町廻り同心を長く経験した、隠居手前の同心が就任することになっている。定町廻り同心の手が足りないときなどに出動する閑職だ。

名齋は、定町廻り同心をしつつ、ほかの受け持ち区域の同心から頼まれごとをしていた。それを見たいまの北町奉行遠山景元とおやまかげもとから、義父良蔵のように、臨時廻り同心になれと言いつかつたのだ。

調理場では、細くきれいな指で、お彩が鮎あなに塩をまんべんなく振っている。隣にすわっている勘六だんごが低い団子だんごつ鼻ばなをひくつかせる。

年は五十、義父の時代から小出家に仕えている。

いまは、屋敷の離れにある粗末な小屋で寝起きしている。食事も膳をみずから運び、小屋で摂とっている。

同心たちのなかにあっても、小柄な名齋よりも、さらに背丈が低い。いつも腰が曲がり気味だが、股引ももひきを穿はいたがに股またで、忙せわしげに、せかせかと歩く。

調理場のなかで、お彩が器用に菜箸さいばしを使いながら、鮎を焼きつづけている。ときどき網に脂が落ちて、じゅつと音を立てる。

「鮎、一年ぶりですね、旦那」

勘六がいかにも、うれしそうに言う。

「そうだな」

「あらっ……」

お彩が、名斎と勘六のほうを見て、訊いてきた。

「お屋敷で鮎を召し上がらないのですか」

名斎と勘六は同時に手をひらひらとさせて顔を見合わせた。

「家で食ったことないな」

「ありやせんね。魚といや、目刺しだ」

「それは嫌味か」

「いえいえ」

お彩が笑う。

帰宅して、鮎を食ってきたとは言えない。

良蔵も、勘六も、名斎も、「おかえり」の馴染みだが、小出家の女たちには

内緒なのだ。

勘六といっしょにはじめて「おかえり」に連れてこられたとき、良蔵に言わ